

ある南アフリカ人カラードのアメリカ旅行 ——ダニエル・ウイリアム・アレグザンダーの旅行記から——

荒木圭子*

本稿は、1927年、アフリカ正教会（African Orthodox Church）の南アフリカ総主教に任命されたダニエル・ウイリアム・アレグザンダーが、叙任式に出席するために南アフリカからイギリスを経由してアメリカを訪問した際の手書きの旅行記を一部省略しながら訳出したものである。この旅行記は、エモリー大学のピッツ神学図書館のアフリカ正教会資料のなかに所蔵されている¹⁾。

アフリカ正教会は、1921年にアメリカ合衆国で創設された黒人独立教会である。創設者のジョージ・アレグザンダー・マクガイアは、当時アメリカ黒人たちの間で熱狂的に受け入れられていたガーヴィー運動の中核にいた経験をもつ人物であった。パン・アフリカニズムを掲げる同運動の影響を多分に受け、マクガイアは最終的にアフリカでの同教会の設立を目指した。

アフリカにおいて同教会の設立を担ったのが、南アフリカのアレグザンダーである。アレグザンダーはガーヴィー運動の機関紙『ニグロ・ワールド』によって同教会の存在を知り、1924年に南アフリカのキンバリーで、自らの率いる独立教会をアフリカ正教会に改めることを決定した。

アレグザンダーはアメリカの同教会による1年の観察期間を経て1927年に渡米し、マクガイアによって正式に聖職叙任された。これにより、アフリカ正教会はアメリカと南アフリカに二つの大主教区をもつこととなった。このようなアフリカ正教会のアフリカへの拡大は、パン・アフリカニズムの実践であり、ポール・ギルロイの提示した『ブラック・アトランティック』の実体化のひとつとしてとらえることができる²⁾。

ここで指摘したいのが、アレグザンダーが南アフリカにおける「カラード」であったという点である。当時、米国における人種区分では、「混血」は「黒人」に含められていたが、南アフリカにおいてはそうではなく、「混血」である「カラード」と「アフリカ人」の間には明確な境界線が引かれていた。アディカリが強調しているように、「カラード」のアイデンティティは時代によって変化してきたものの、アフリカ人からの乖離と白人への同化といった傾向は一貫して見られるものであった³⁾。

「カラード」であるアレグザンダーが、従来「黒人」による超国家的運動としてとらえられ

受理日2014年11月26日

*教養学部国際学科准教授

てきたパン・アフリカニズムの実体化とそれによる「ブラック・アトランティック」の形成・発展を引き受けていたことは注目に値する。「ブラック・アトランティック」における主体の再検討を促すものだからである。

本稿では、アレグザンダーによる「ブラック・アトランティック」の軌跡をたどるべく、彼自身の旅行記を紹介したい。この旅行記は、ほぼ同内容のものが一部、アフリカ正教会の機関誌『ニグロ・チャーチマン』に掲載されたが、本稿で扱うのは、その前に書かれたアレグザンダー自筆の草稿である。これは南アフリカの教会の会衆に向けて書かれたもので、アメリカ人を主な読者とする『ニグロ・チャーチマン』に掲載されたものよりも素朴で率直な内容となっている。アレグザンダーはほかに旅行中の日記も残しているが、それら全てを使った分析は別稿で行うこととし、ここでは草稿そのものを紹介したい。なお、旅行記は1部と2部に分かれているが、本稿ではその内容を時系列順に記載する。

7月2日土曜日、私はアーネスト・オッペンハイマー氏から受け取った30ポンドを手にキンバリーを後にし、ケープタウンに向かった⁴⁾。同地には3日の日曜日に到着し、29日まで滞在した。[・・・]そして私はアメリカへの旅に出発した。平穏無事な旅で、17日後にイギリスに到着した。[・・・]

〔旅行記 1〕

サウサンプトン！ 波止場を出て町に行くと、タクシーや荷馬車、木材運搬貨車といった見慣れた光景を目にした。[・・・]しばらく辺りを見回してから、私は理髪店に入った。かれらは皆、気配りが効いていて礼儀正しく、私は肌の色が障害とならないイギリスにいるのだという事実気づかされた。そして私はロンドンに行くため駅に向かったが、なんという旅であろう。汽車に2つのクラスしかない。3等車か1等車である。南アフリカの鉄道のように、その中間がないのである。私は3等車両に入った。なぜ1等車でないのかって？ 必要ないからである。豪華な客車が、より快適なわけではない。そこには人があふれているのだ。

私が入ると、人々は場所を空けてくれた。そして天気についての会話を交わしたあと、私が南アフリカ人だと知ると、彼らは皆ほとんどすぐに南アフリカの国旗について聞いてきた。南アフリカでは英国旗は廃止されるのか？ 私は、政治家ではないのでこれからどうなるかは分からないが、一般人として、英連邦の国章が（南アフリカの）旗から取り除かれることはないだろうと答えた。

[・・・] ついにウォータールーに到着した。汽車からプラットフォームに降り立つと、「世界で最も偉大な都市ロンドン」のメロディーが心に浮かんだ。[・・・] 西インド諸島であろうと南部あるいは西部アフリカであろうと、ユニオンジャックの下に生まれた者ならばどんな者でも、ロンドンに到着し、牧師や主人から多くを聞いていたこれらの建物や施設を目にしただけで、達成感を感じるに違いない。イギリス人が母国を自慢することを非難できるだろうか。イギリス人は確かに誇りを感じる理由があるのだ。

ポーターが私のスーツケースを持ってタクシーを呼び止めた。私は D. E. スコット氏の指示通り、ロンドン・ポリテクニクの建物にある観光協会の本部へ向かった。スコット氏は南アフリカで同協会の代理をしており、私に宿泊施設を手配するよう記した手紙をもたせてくれた。彼らはグレート・ポートランド・ホテルの部屋を予約してくれた。

［・・・］（ホテルの）玄関をまたぐと、そこから私は重要な人物となり、恥をかいたり混乱しないように故郷で訓練してきたものを全て披露した。友よ、ロンドンの大きなホテルの客となることは、それ自体、教育である。なぜならイギリス人、とくに上流階級の人々は、文化的で品位のある人々だからである。彼らのなかにいるときは、批判を受けないような態度を取らなければならない。そして私は最初の午後、そのようなテストに合格して、いつもの自制心を手に入れた。

［・・・］ 7時になり、夕食の時間となった。ダイニングルームに降りていくと、すべての視線が私に注がれた。なぜなら私は部屋のなかで唯一の黒人（Blackman）だったからである。私が部屋に入る前から観察が始まっていたと確信する。給仕長がテーブルに案内すると、私はすべての目が私に向けられているのがわかった。そして友よ、若い女性が注文をとり近づいてくると、私は重要人物になったと感じた。彼女は私の給仕担当のウェイトレスである。

誰の人生にも、生きていてよかったと思う時がある。どんな困難や苦難に耐えることを強いられてきたにしても、それが報われたと感じる特別な一瞬があるのだ。私はテーブルに座りながらその瞬間を感じた。そしてホテルの中でまめまめしく仕えられることによって、全ての疲れや不安が、その瞬間に私から落ち去っていき、新しい見地を得た。

宿泊客は私が素手ではなくナイフとフォークで食べるかどうか、こっそりと見ていた。しかし料理が終わり、私がロス・ジンジャーエールを注文するほどにまで大胆になると、ロスを飲むことができるならば多少味が分かるのだらうと言わんばかりに雰囲気明るくなった。・・・私は「あなたも1杯どうぞ」と付け加えることで、給仕長と懇意になった。私たちがテーブルから立ち上がったとき、私は自分が好ましい印象を与えたことが分かった。なぜならば、［・・・］「初めまして」、「どのくらい滞在されるのですか」といった満足を示すコメントに対し、私は最も上品な笑顔で応じたからである。

部屋に戻ると、すべてが整然と整えられていた。［・・・］すべてのものがスーツケースの外に出され、吊るされたり、たたんでしまわれており、お湯も運ばれていた。客室係はせわしなかったが丁寧であった。こうして私はロンドンの有名なホテルでの最初の晩、気品のある客として合格した。

［・・・］ 私はドアの外にブーツを置いておくように言われた。朝5時頃にボーイがやってきて綺麗にしてくれるためである。彼らは客を邪魔しないように外にいないといけない。7時15分頃には、必要な人々のためにコーヒーが運ばれた。そして「牧師さま、何時頃お風呂に入られますか」と聞かれた。［・・・］ ありがとう。私はこれら全てのことによって、一晩で成長したように思う。もう未熟ではない。私はあちこちへと動き回り、全てのことを、まるでこれまでずっとそうであったかのように受け入れた。

私はロンドンに行って名所を見たくてしかたがなかった。今日は火曜日で、水曜日には再び

オリンピック号に乗るためにサウサンプトンに向かわなければならないのだ。私はガイドを捜し、メッセンジャーボーイを雇った。私たちはストランドを歩いた。なんという車と人の流れだろう！ 道はほぼふさがれていた。目新しさのため、私たちは結構な距離を歩き、[・・・] 疲れるとバスに乗った。[・・・]

この大きな教会は何だ？ 大きなドームがあって、正面は古代ギリシアの寺院のような教会は？ 答えはセントポール大聖堂である。私の心臓はどんなに脈打ったことだろう。私はこれまでたくさんの噂を聞いてきた有名な大聖堂の目の前に立つという特権を手にした。[・・・] 友よ、あなた方は笑ったりからかったりするかもしれないが、私はそこで口や目や耳、そして鼻までも大きく広げて立っていた。胸もドキドキしていた。

私は一足飛びに入口に立ち、しばらくまとまりのない考えを思い起こした。そして敬意をもって中に入った。すると突然オルガンの音が鳴り響き、私はほかの何百人もの人々とともに晩祷を聞く栄誉にあずかった。彼らの中には私のように何千マイルも旅して初めてその場所に來た人もいたかもしれない。主席司教の声にはなんと威厳があるのだろう。[・・・] 私はひざまずいて祈った。このような偉大な教会にいるという機会を神に感謝し、祈りの声を高めた。聖歌が終わると私は他の場所をみるために外へ出た。 [旅行記 2]

水曜日の朝、私は再び乗船し、[・・・] 12時にはイギリス海峡を通過してシェルブールに着いた。手紙や乗客を乗せた後、アメリカに向かい7日目の午後6時、私たちはジャージー海岸に着いた。[・・・] 手紙を届けた後、私たちは波止場に向かった。私は再び移民局職員 の検査を受け、それから上陸のためのチケットをもらった。[・・・] 船室に戻る途中、脇を見やると、総主教やその他の人々がいるのが見えた。私は彼らに呼びかけると、彼らは私を見てとても嬉しそうであった。[・・・] 1時間半後、私はアメリカに上陸した。

それから私は総主教と寝食をともにすることになったが、9月初めに約8日間病気になるってしまった。私は条件付き傳膏機密を受けたほか、南部管轄区の主教ウィリアム・アーネスト師によって聖職者、守門、誦經者、堂役、祈祷師の下級聖職位を、大主教兼アメリカ地区総主教アレグザンダー尊師によって副輔祭、輔祭、司祭を叙任された。そして1927年9月8日、私たちはニューヨークを離れて文化の街ボストンへ旅立った。[・・・] 5日に始まっていた教会会議では、UNIA 代理総会長 J. A. トゥート氏による歓迎スピーチに応える名誉にあずかり、私はアメリカで初めて公でのスピーチを行った⁵⁾。

9月10日土曜日、秘密会議において協約にサインをしたあと、私は初めて大主教に任命されることを知った。[・・・] 私は大主教に選任されたが、このことは将来多くの問題を引き起こすであろう。9月11日 [・・・]、私はセント・ミカエル・アンド・オール・エンジェルズ礼拝堂において、厳かに大主教および南アフリカ地区総主教に任命された。

ボストンの人々はとても親切であった。特にだれかの名前を挙げることはできないが、全ての人がそれぞれ私を楽しませようと努めていた。何人かはさらなる努力さえしてくれていたことを私は知っている。教会会議のあと、[・・・] 帰りのチケット代のため、さまざまな教会で説教や講演を行うことがすでに決められていたため、私たちの活動のための財政的援助を得

ることはできなかった。多くの会衆が多額の賃貸料が発生する貸しホールでミサを行っていたことも理由のひとつである。とくにニューヨークでは賃貸料は大きな障害であり、冬にはひどい困難をもたらした。

労働局は300万人もの人々が失業していると推計していた。[・・・] 私の訪れた多くの教会では、私が説教をしたあと、教区牧師がまず賃貸料と長期的な借金返済のための寄付を求め、そのあと私の帰りの旅費の分担分への寄付を求めた。これはしばしばとてもやっかいなことになった。なぜならば、人々は1回目は寄付をするが、2回目にはしないからである。現在に至っても、自分の分担分を送ってこない聖職者がいる。多くの場合、嫉妬によって私はさまざまな場所に説教しに行くことを止められた。

もし次回、旅程を自分で準備するならば、人々が自由に私に面会できるように手配するであろう。そして講演や説教などは全て私が管理できるようにして、自分で許諾するか、あるいは無利益なものは拒否できるようにするであろう。今回の旅は、私個人にとっての教育であった。私の見解を広げ、新たな洞察力と白人と黒人双方に対する見識を深めることができた。

最後に、私はこれほど多くのことを達成させてくれた多くの人々に感謝する。この建物の購入を助けてくれたヨーロッパ人とカラード両方の友人たちと会衆の人々。これがなければ、私はアメリカに行くための資金を借りることができなかった。[・・・]

帰国を支援してくれた方々とここにいる全ての方々のもとに神のご加護がありますように。

ダニエル・ウイリアム

神学博士

大主教兼南アフリカ教区総主教

〔旅行記1〕

注

- 1) 1/15, Travelogue, African Orthodox Church Records, RG 005, Archives and Manuscripts Dept., Pitts Theology Library, Emory University.
- 2) ポール・ギルロイ『ブラック・アトランティック―近代性と二重意識』（月曜社、2006年；原著は1993年発行）
- 3) Mohamed Adhikari, *Not White Enough Not Black Enough: Racial Identity in the South African Coloured Community* (Ohio University Press, 2005)
- 4) アーネスト・オッペンハイマーは1927年にセシル・ローズの後を受けてデビマス社の社長となった。アレグザンダーはキンバリーで教会活動が続ける中、デビマス社との友好的な関係を保っていた。デビマス社はアフリカ正教会の建物購入の際の資金など、しばしばアレグザンダーに対して寄付を行った。Morris R. Johnson, *Archbishop Daniel William Alexander and the African Orthodox Church* (Lanham: International Scholars Publication, 1999), pp.58-9
- 5) UNIAはガーヴィーの運動組織である万国黒人地位向上教会 (Universal Negro Improvement Association) の略。

付記 本研究はJSPS 科研費 22710255 の助成を受けたものです。

